④麻黄配合の漢方処方による血圧上昇

麻黄の主成分はエフェドリンであり、交感神経β受容体刺激作用がある。従って高血圧症患者に投与する場合は少量から開始して漸増しつつ経過を観察すべきである。狭心症の既往があるものにも慎重な投与が望まれる。また、高齢の男性では排尿がスムーズに行かなくなることがある。

⑤乳糖不耐症による腹部膨満・下痢

多くの漢方製剤は賦形剤として乳糖を用いている。従って乳糖不耐症を体質としているものでは、このための腹部膨満感、下痢などを来すことがある。日常的に乳製品の摂取によって下痢などを来すことがないかを質問するとよい。乳糖不耐症があらかじめ予測される場合には乳糖分解酵素剤を漢方製剤と併用すると良いことがある。

まとめ

漢方製剤は漢方の病態認識である「証」に基づいて用いるべき薬剤である。本書はこの理念に沿って「しばり」や効能・効果、あるいは解説が工夫されている。しかし、これとは全く別に薬剤としての副作用が現れることがあり、「証」の取り違えか、副作用かの判断に迷う事例もある。特に致死的な副作用が稀にではあるが出現することを銘記し、疑わしい場合には服薬を中止させ、すみやかに医療機関に紹介する必要があることを記した。

本書の構成と記載方法

- 本書では、処方ごと、最初のページ（見開きの左ページ）に「処方構成」「用法・用量」「しばり」「効能・効果」「原典」「出典」「解説」を、続いて次のページから、参考文献とその処方構成および注を記載した。
- また、常に見開きの左ページから処方ごとの記述を開始するようにした。従って右ページが白紙の場合がある。
- 参考文献の記載は、新規収載処方では、正式な書名を用いた。既収載処方では、従来どおり巻末に示した略称を使用した。
- 文字はなるべく正字を使用したが、「葛根」の「葛」の字等、コンピュータの辞書に入っていない文字についてはやむを得ず略字を使用した。

処方番号：1　　**処方名**：安中散（あんちゅうさん）

処方構成：
桂枝 3-5、延胡索 3-4、牡蛎 3-4、茴香 1.5-2、縮砂 1-2、甘草 1-2、良姜 0.5-1

用法・用量：
（１）散：1 回 1-2g　1 日 2-3 回
（２）湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で腹部筋肉が弛緩する傾向にあり、胃痛又は腹痛があって、ときに胸やけや、げっぷ、食欲不振、はきけなどを伴うものの次の諸症

効能・効果：
神経性胃炎、慢性胃炎、胃腸虚弱

原典：太平恵民和剤局方
出典：勿誤薬室方函口訣

解説：
胃痛を伴う胃疾患の鎮痛剤として用いられるが腹部筋力は弾力に乏しく弛緩し、へそのあたりに動悸を触れ、やせ型で甘味を好むタイプの慢性的に経過する胃痛持ちに用いる。
『方函類聚』に「癖嚢（胃の弛緩症、拡張症）ノ主薬ナリ痛甚者ヲ主トス、反胃（胃癌）ニ用ユルニモ腹痛ヲ目的トスヘシ、又婦人血気（月経痛）刺痛ニハ癖嚢ヨリ反テ効アリ」とある。

1.安中散

参考文献名		桂枝	延胡索	牡蛎	茴香	縮砂	甘草	良姜	茯苓	用法・用量
処方分量集		4	3	3	2	1	1	1		
診察の実際		4	3	3	2	1	1	1		
診療医典	注1	4	3	3	2	1	1	1		
症候別治療		4	3	3	2	1	1	1		
処方解説	注2	5	4	4	2	2	2	1		(多く茯苓を加える) *1
後世要方解説		4	3	3	2	1	1 (炒)	1		(一方:加乾姜一炮) *2
応用の実際	注3	3	3	3	2	2	2	1		*3
明解処方		4	3	3	2	1	1	1		
基礎と診療		4	3	3	2	1	1	1		
実用漢方療法		5	4	4	2	2	2	1		
診かた治しかた		4	3	3	2	1	1	1		

*1 七味を末となし、毎回1.0～2.0ずつ温めた酒で服用する。(婦人は薄めた酢でもよい)。通常1日2～3回、酒のきらいなものは塩湯を用いるが、一般には微温湯で服用している。煎用することも多く、そのときは上記分量を一日量とする。

*2 七味を末となし、毎服2.0熱酒調下す。婦人は淡酢湯にて調服す。もし酒を飲まざる者は塩湯を用う。白湯で服んでよい。

*3 元来は散薬であるが、今一般に煎剤で用いる。

注1 やや虚状を帯び，慢性に経過した痙攣性疼痛によく奏効する。アトニー型が多く，心下部，腹部はそれほど緊張せず，一般に冷え症，貧血性で，やや衰弱の傾向があり，腹壁は菲薄で臍傍に動悸を触れる。食後あるいは空腹時に心下部に軽痛あるいは鈍痛を発し，嘈囃を訴えるものが多く，ときに酸水を吐し，夕刻不消化物を吐くものもある。また下腹から腰に牽引痛を発する場合もある。

注2 脾胃(おもに胃のこと)の虚寒と気鬱血滞による胃痛，腹痛というのが主目標で，次のような諸徴候を参考とする。痩せ型で皮膚筋肉の弛緩傾向，脈は虚，軟，腹も軟弱(ときにやや緊張していることもある)で，動悸(とくに臍傍)，胃内停水などを認めることもある。その他，心下痛，心下痞満，腹満(軽度)，下腹部より腰背に及ぶ牽引性疼痛，過酸(または低酸)症，食欲不振，嘔吐(軽度)などである。

方輿輗には「婦人，血気刺痛，小腹(下腹)ヨリ腰ニ連リ，功痃重痛(牽引痛)スルヲ治ス」とあり，勿誤方函口訣には「此方世上ニハ癖嚢(胃拡張)ノ主薬トスレドモ，吐水甚シキ者ニハ効ナシ。痛ミ甚シキ者ヲ主トス。反胃(胃拡張，胃癌の類)ニ用ユルニモ腹痛ヲ目的トスベシ。又婦人血気刺痛ニハ癖嚢ヨリ反テ効アリ」といっている。

注3 体力が低下している体質虚弱な人が，胃が痛んだり，胃酸を吐いたり，胸やけがするときに用いる。食物消化はわるく，いつまでも胃に停滞し，胸や上腹部が張り，悪心，嘔吐，四肢倦怠，などがおこり，体重が減少するものである。

処方番号：1A　　**処方名**：安中散加茯苓（あんちゅうさんかぶくりょう）

処方構成：

桂枝 3-5、延胡索 3-4、牡蛎 3-4、茴香 1.5-2、縮砂 1-2、甘草 1-2、良姜 0.5-1、茯苓 5

用法・用量：

（１）散：1 回 1-2g　1 日 2-3 回

（２）湯

しばり：

体力中等度以下から虚弱で腹部筋肉が弛緩する傾向にあり、神経過敏で胃痛又は腹痛があって、ときに胸やけ、げっぷ、食欲不振、はきけなどを伴うものの次の諸症

効能・効果：

神経性胃炎、慢性胃炎、胃腸虚弱

原典：太平恵民和剤局方

出典：勿誤薬室方函口訣

解説：

胃痛を伴う胃疾患の鎮痛剤として用いられるが腹部筋力は弾力に乏しく弛緩し、へそのあたりに動悸を触れ、やせ型で甘味を好むタイプの慢性的に経過する胃痛持ちに用いる。

『方函類聚』に「癖嚢（胃の弛緩症、拡張症）ノ主薬ナリ痛甚者ヲ主トス、反胃（胃癌）ニ用ユルニモ腹痛ヲ目的トスヘシ、又婦人血気（月経痛）刺痛ニハ癖嚢ヨリ反テ効アリ」とある。

安中散に準ずるが、臍の辺りの動悸がより強く、胃下垂傾向のものに用いる。

処方番号：2　　**処方名**：胃風湯（いふうとう）

処方構成：
当帰 2.5-3、芍薬 3、川芎 2.5-3、人参 3、白朮 3、茯苓 3-4、桂枝 2-3、粟 2-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以下から虚弱で顔色悪くて食欲なく、疲れやすいものの次の諸症

効能・効果：
急性胃腸炎、慢性胃腸炎、冷えによる下痢

原典：太平恵民和剤局方
出典：

解説：
胃腸が虚弱で寒冷にあえばすぐ下痢するようなものの、慢性に経過する下痢で疲れて衰弱しているものに用いる。便は不消化便、水様便、粘液便、わずかに血液を混ずる便等である。
『方函類聚』には「傷食ニ水飲ヲ帯ル者其他水穀不化下利或ハ脾胃不和シテ水気ヲ発スル者ニ用ユヘシ」とある。
しばしば甘草を加える（その場合、四君子湯の方意が加わる）。

2. 胃風湯

参考文献名		当帰	芍薬	川芎	人参	白朮	朮	茯苓	桂枝	粟
処方分量集		3	3	3	3	3		4	2	2
診療医典	注1	3	3	3	3	3		4	2	2
症候別治療		3	3	3	3	3		4	2	2
処方解説	注2	3	3	3	3	3		4	2	2
後世要方解説		3	3	3	3	3		4	2	2
応用の実際	注3	2.5	3	2.5	3	3		3	3	3
漢方処方集		3	3	3	3	3		3	3	若干
診かた治しかた		3	3	3	3	3		3	3	4

注1 日常胃腸の弱い人が，寒冷にあえば下痢を起こしやすく，便は軟便，不消化便，あるいは水様便，ときにはわずかに粘液や血液を混ずることがあってもよい。

注2 日常胃腸の虚弱な人で，寒冷などによって下痢を起こしやすく，慢性に経過して，体力も衰弱に傾き，炎症は大体盛りを過ぎた残存性のもので，小腸ばかりでなく大腸や直腸に及んでいるものを目標とする。

和剤局方(瀉利門)に「大人小児，風冷，虚ニ乗ジテ入ッテ腸胃ニ客シ，水穀化セズ，泄瀉注下，腹脇虚満シ，腸鳴リ疠痛シ，及ビ腸胃ノ湿毒下ルコト豆汁ノ如ク，或ハ瘀血ヲ下スコト日夜度無キヲ治ス。並ニ宜シク之ヲ服スベシ」とあり。

勿誤方函口訣には「此方ハ水穀化セズシテ，稀汁ト血液ト漏下シテ止マズ。顔色青惨荏苒(慢性化し)歳月ヲ延バス者ヲ治ス」とある。

注3 胃腸の虚弱な人が，腹を冷やしたり，いわゆる感冒性下痢などで下痢するものである。このとき腹鳴りがあり，腹が痛むこともあり痛まないこともある。大便は水様便で米のとぎ汁のようなこともあり，血液を混じていることもあって，渋り腹のことが多い。

処方番号：3　　**処方名**：胃苓湯（いれいとう）

処方構成：

蒼朮 2.5-3、厚朴 2.5-3、陳皮 2.5-3、猪苓 2.5-3、沢瀉 2.5-3、芍薬 2.5-3、白朮 2.5-3、茯苓 2.5-3、桂枝 2-2.5、大棗 1.5-3、生姜 1.5-2、甘草 1-2、縮砂 2、黄連 2　（芍薬、縮砂、黄連のない場合も可）

用法・用量：

（１）散：1 回 1-2g　1 日 3 回

（２）湯

しばり：

体力中等度で水様性の下痢、嘔吐があり、口渇、尿量減少を伴うものの次の諸症

効能・効果：

食あたり、暑気あたり、冷え腹、急性胃腸炎、腹痛

原典：万病回春

出典：古今医鑑

解説：

五苓散と平胃散の合方で、平素体質的に水はけの悪い体質の人が、腹をこわしたため、水分の吸収が悪くなって食物が不消化のまま水様便として下るもので口渇、胃内振水音、腹がはり、尿量減少の症状があるものに用いる。

『方函類聚』に「厚朴、橘皮、甘草、蒼朮、猪苓、沢瀉、茯苓、桂枝、の８味からなり、傷食ニ水飲ヲ帯スル者其他水穀不化下利或ハ脾胃不和シテ水気ヲ発スル者ニ用ユヘシ」とあり、加味胃苓湯（類萃）蒼朮、茯苓、猪苓、沢瀉、厚朴、橘皮、蘇葉、莎草、木香、白朮、生姜、の 11 味からなり「治一切水腫脹満随証加減攻如神、水穀不化ヨリ来ル水気ヲ治ス。傷寒後ニ用ル事あり、又利後風ニハ別シテ効アリ」とある。

3. 胃苓湯

参考文献名		蒼朮	厚朴	陳皮	猪苓	沢瀉	芍薬	白朮	茯苓	桂枝	大棗	乾生姜	甘草	縮砂	黄連
処方分量集		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2	1	1(乾姜)	1		
診療の実際		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	2.5	2	1.5	1.5	1		
診療の医典	注1	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	2.5	2	1.5	1.5	1		
症候別治療		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2	1.5	1.5	1		
処方解説	注2	3	3	3	3	3	3	3	3	2.5	1.0	1.0	1		
後世要方解説		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2	1.5	1.5	1.5		
応用の実際	注3	3	3	3	3	3	−	3	3	−	3	2	2	2	2
明解処方		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	−	2.5	2.5	2	1.5	1.5	1		
漢方処方集		3	3	3	3	3	3	3	3	2	−	−	2		

注1 平胃散と五苓湯の合方で急性腸炎によく用いられる。下痢，口渇，微熱などを目標とする。またネフローゼに用いて効がある。

注2 「中暑，傷湿，停飲，夾食(食を夾む，食の停滞)脾胃和せず，腹痛，洩瀉(水様下痢)渇を作し，小便利せず，水穀化せず，陰陽分たざるを治す」

急性胃腸炎で小便不利し，腹痛下痢するもの，急性腎炎，ネフローゼ，夏期の食あたり，夏の神経痛などに用いられる。

注3 平ぜい水毒がある体質で，胃内停水があったり水ブトリの人の食あたり，暑気あたりによる下痢に用いる。食物の消化がわるくてそのまま水様性の下痢をし，腹が張り小便の出が悪く，腹が痛むものである。腹痛はあまり激しくなく，また痛まないこともある。

処方番号：4　　**処方名**：茵蔯蒿湯（いんちんこうとう）

処方構成：
茵蔯蒿 4-6、山梔子 2-3、大黄 0.8-2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度以上で口渇があり、尿量少なく、便秘するものの次の諸症

効能・効果：
じんましん、口内炎、皮膚のかゆみ

原典：傷寒論、金匱要略
出典：

解説：
黄疸に用いる著名な薬方であるが、裏の実熱による各種疾患に用いられる。したがって上腹部が張り、心下部から胸部にかけて塞がるような不快な苦しさがあり、口渇、便秘、腹部微満、尿量減少、頭汗、頭眩、発黄、皮膚掻痒感、等の症状があるものに用いる。

『方函類聚』に「初発ニ先此方ヲ用テ下ヲ取テ後茵蔯五苓散ヲ用ユヘシ、茵蔯ハ発黄ヲ治スレトモ梔子大黄ト伍スルトキハ利水ノ効アリ」とある。また方名の類似しているもので、心中に熱があり恍惚、多驚、不眠に用いる、茵蔯散（聖済）、は茵蔯、柴胡、芍薬、茯苓、黄芩、麦門、梔子、犀角、甘草、生姜、竹葉、地黄の 12 味からなり、また牙歯疼痛、歯断腐爛に用いる。茵蔯散（醫通）は茵蔯、荊芥、薄荷、蓮蕊、麻黄、升麻、独活、姜蠶、細辛、大黄、牽牛子の 11 味からなる方剤であり、湯と散のちがいであるが、処方用法の異なるものである。

4. 茵蔯蒿湯

参考文献名		茵蔯蒿	山梔子	大黄
処方分量集		0	3	1
診療の実際	注1	4	3	1
診療医典	注2	4	3	1
症候別治療		4	3	1
処方解説	注3	4	3	1～2*1
応用の実際		4	3	1
明解処方		6	2	2
漢方処方集		6	1.4	2*2
基礎と診療		6	1.4	2
実用漢方療法		14	5	1～3
診かた治しかた		4	3	1
金匱要略入門		6	2	2

*1 原本には、まず茵蔯を煮て後、他の二味を入れて煎じることとなっている。しかし一般には同時に煎じることが多い。

*2 水480で先ず茵蔯を煮て240に煮つめ、他薬を加え、さらに煮て120に煮つめ1日3回に分服。

注1 主としてカタル性黄疸の初期で実證のものに用いられる方剤であるが，必ずしも黄疸がなくてもよい。裏に瘀熱のあるのを目標とする。

注2 腹部殊に上腹部が膨満し，みぞおちから胸中にかけて形容しがたい不快感があり，胸が塞ったようで，悪心を訴える。また口渇があって，水をのむのに尿量が少なく，便秘する。黄疸を起こすような場合には，尿は黄柏の煎汁のような色になる。定形的の場合は，以上の症状がそろっているが，ときには口渇がなかったり，尿量の減少が著明でないこともある。

注3 裏に鬱熱があって煩悶し，あるいは黄疸を発するのが主目標で，次のような諸徴候を参考とする。腹部ことに上腹部が微満し，心下部より胸部，心臓部にかけて，苦悶や不快を訴え，胸がふさがったように感じ，口渇，便秘，腹満，小便不利，頭汗，頭眩，発黄などがある。黄疸がなくとも裏に鬱熱があれば用いてよい。

傷寒論(陽明病篇)に「陽明病，発熱汗出ル者ハ此ヲ熱越(裏の熱が表に越してくるという意味）ト為ス。黄ヲ発スルコト能ハザルナリ。但頭汗出デ，身ニ汗ナク，頸ヲ剤リテ還リ，小便不利，渇シテ水漿(のみもの)ヲ引ク者ハ，此レヲ瘀熱（古びた熱，内にこもった熱）裏ニ在リト為ス。身必ズ黄ヲ発ス，茵蔯蒿湯之ヲ主ル」「傷寒七八日，身黄ナルコト橘子色(みかんの実の色)ノ如ク，小便不利，腹微満スル者ハ茵蔯蒿湯之ヲ主ル」とあり，また金匱(黄疸病門)には「穀疸ノ病タル，寒熱不食ス。食スレバ則チ頭眩シ，心胸安カラズ。久々ニシテ黄ヲ発シ穀疸トナル。茵蔯蒿湯之ヲ主ル」とある。穀疸は胃に湿気停水があるところへ穀を食べ，胃熱を生じ，湿と熱と食とが結合して黄疸を発すると云う意味のもので，カタル性黄疸のことである。すなわち食毒，水毒，熱毒の三毒によって発する黄疸である。

処方番号：5　　**処方名**：烏薬順気散（うやくじゅんきさん）

処方構成：
麻黄 2.5-3、陳皮 2.5-5、烏薬 2.5-5、川芎 2-3、白彊蚕 1.5-2.5、枳殻 1.5-2、白芷 1.5-3、甘草 1-1.5、桔梗 2-3、乾姜 1-2.5、生姜 1、大棗 1-3　（生姜・大棗を抜いても可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度のものの次の諸症

効能・効果：
しびれ、筋力の低下、言葉のもつれ、四肢の痛み、肩こり、顔面神経麻痺

原典：太平恵民和剤局方
出典：

解説：
手足のシビレや運動障害、肩や上肢の疼痛などに用いられる。脳梗塞の予防や脳梗塞後の諸症状にも用いられる。四十肩・五十肩・顔面神経麻痺などにも応用される。

5.烏薬順気散

参考文献名		麻黄	陳皮	烏薬	川芎	白彊蚕	枳殻	白芷	甘草	桔梗	乾姜	生姜	大棗	用法・用量
漢方治療の実際	注1	2.5	2.5	2.5	2	2	2	2	1	2	−	1	1	
漢方処方応用の実際	注2	2.5	2.5	2.5	2.0	2.0	2.0	2.0	1.0	2.0	1.0	1.0	1.0	
漢方診療医典		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.0	1.5	1.5	2.5	2.5	−	−	
臨床応用漢方処方解説	注3	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.0	1.5	1.5	2.5	2.0	−	−	
改定新版漢方処方集	注4	3.0	5.0	5.0	3.0	1.5	3.0	3.0	1.0	3.0	1.5	1.0	3.0	
経験漢方処方分量集		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2	1.5	1.5	2.5	−	1.0	−	
漢方後世要方解説	注5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	1.5	1.5	1.5	2.5	2.5	−	−	
新版漢方医学		2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2	1.5	1.5	2.5	2.5	−	−	

注1

この方は気のめぐりをよくする方剤で、気のめぐりのわるいために起る四肢のシビレ、いたみなどによい。そこで俗にいうギックリ疝気や足のくじきに用いる。足を踏みはずしたり、足をくじいたり、重い荷物を持ち上げた拍子に、腰の筋をちがえたりして痛む場合によい。また、寝違えて首のまわらないもの、また赤ん坊に手枕をさせたために、肘が冷えて痛むものなどにもよい。また万病回春ではこの方に木瓜を加えて回首散と名づけて、肩につまって、首のまがらないものに用いている。また脳出血で、手足がしびれたり、痛んだりするものにも用いる。

注2

〔目標〕 表証があって頭痛、発熱、悪寒を伴う四肢麻痺、半身不随、顔面神経麻痺などに用いる。このとき、あるいは四肢のしびれ感、頸筋の拘攣による頭首廻転不能(首がまわらない)、口のひきつれ、言語障害などを呈することが多い。また歩行するのに何となく足もとの具合がわるいということもある。

〔説明〕 以上のような症状は、脳卒中の初期などに多くおこるもので、百々鳩窓は、軽い中風には専らこの方を用いるといっている。ただ意識障害があるような重症には用いられないともべている。また同じく梧竹楼方函口訣で、この方は一切の気滞による四肢麻痺によいともいっている。衆方規矩には、その他脚気、婦人の血風(瘀血性の麻痺)、老人の冷気(新陳代謝が低下したための厥冷など)にもよいと記してある。

〔応用〕 脳塩血、脳軟化症、その他の麻痺、脚気、老化現象など。

注3

脳溢血で、手足骨節の疼痛、言語障害、筋脈引きつり痛み、肩および上肢の疼痛、シビレ感などを訴え、脚弱、歩行困難のものを治す。脳溢血による手足疼痛・手足シビレ感・肩臂疼痛・四十腕・五十肩・顔面神経麻痺・脚気などに応用される。

注4

〔目標〕 身体痛、関節痛、麻痺、言語障害碍等の内どれかが主になる。

〔応用〕 筋肉リュウマチ、関節リュウマチ、脳塩血、半身不随、脚気、五十肩、四十腕

注5

男子婦人一切の風気、攻注、四肢骨折疼痛、遍身頑麻、頭目旋暈するを治す。及び癰瘍、語言蹇渋、筋脈拘攣を療す。又脚気歩履艱難、脚膝軟弱、婦人の血風、老人冷気上攻し、胸臆両脇刺痛、心腹膨張、吐瀉腸鳴を治す。

処方番号：6　　**処方名**：烏苓通気散（うれいつうきさん／うりょうつうきさん）

処方構成：
烏薬 2-2.5、当帰 2-3、芍薬 2、香附子 2-2.5、山査子 2-2.5、陳皮 2、茯苓 1-3、白朮 1-3、檳榔子 1-2、延胡索 1-2.5、沢瀉 1-1.5、木香 0.6-1、甘草 0.6-1、生姜 1（ヒネショウガを用いる場合 2）

用法・用量：
湯

しばり：
体力に関わらず広く用いる

効能・効果：
下腹部の痛み、乳腺の痛み

原典：万病回春
出典：勿誤薬室方函口訣

解説：
『勿誤薬室方函口訣』に「一切の疝気を治す。遠近寒熱を問う無し」と主治が記載され更に口訣として「この方は後世、疝の套剤とすれども、疏気利水が主意にて、寒疝諸症、温散和中の薬効なき者に用いて通気の験著し。その他婦人両乳痛甚だしき者、小児陰嚢急痛するものに与えて即効有り。通気の二字玩味すべし。」との記載がある。婦人の乳腺症による乳房の腫脹疼痛に著効を奏す。
なお、『万病回春』には山査子は“糖鞠”と記載されているが、これは山査子の異名である（小泉榮次郎『和漢薬考』）。

6.烏苓通気散

参考文献名	烏薬	当帰	芍薬	香附子	山査子	陳皮	橘皮	茯苓	白朮	朮	檳榔子	延胡索	玄胡索	沢瀉	木香	甘草	生姜	用法・用量
漢方診療医典	2	2	2	2	2	2	−	1	1	−	1	1	−	1	0.6	0.6	2	
漢方治療の実際	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	−	1.0	1.0	−	1.0	1.0	−	1.0	0.6	0.6	2	
漢方処方分量集	2.5	3.0	2.0	2.5	2.5	−	2.5	3.0		3.0	2.0	2.5	−	1.5	1.0	1.0	1.0	
改定新版漢方処方集 注1	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	−	2.0	2.0	−	2.0	−	2.0	−	1.0	1.0	1.0	
金匱要略入門 注2	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	一錢	−	五分	五分	−	五分	−	五分	五分	三分	三分	三片	*1

*1　右剤(生姜を除く各生薬)を姜三片いれ水煎服せ。もし悪寒し脉が沉細なるときは呉茱萸を加えよ。

注1
〔目標〕 腹冷痛
〔応用〕 疝気、腹痛、冷え腹、ヘルニア、陰嚢又は精系腫脹

注2
一切の疝気を治す。遠近、寒熱、風湿、寒気を問うなし。

処方番号：7　　**処方名**：温経湯（うんけいとう）

処方構成：
半夏 3-5、麦門冬 3-10、当帰 2-3、川芎 2、芍薬 2、人参 2、桂枝 2、阿膠 2、牡丹皮 2、甘草 2、生姜 1、呉茱萸 1-3

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度かやや虚弱で、手足がほてり、唇がかわくものの次の諸症

効能・効果：
月経不順、月経困難、こしけ、更年期障害、不眠、神経症、湿疹、足腰の冷え、しもやけ、指先のあれ

原典：金匱要略
出典：

解説：
生薬の構成が当帰建中湯、芎帰膠艾湯、当帰四逆加呉茱萸生姜湯、当帰芍薬散、桂枝茯苓丸等に類似しているが原則として瘀血塊は認めない。本方は体内の寒を暖め、瘀血を去り、身体の活力を養う。とくにこしけは単純な腰部冷却によって起こったもの（例えば、夏の冷房病による）によく、病菌によるときは竜胆瀉肝湯がよい。

7. 温経湯

参考文献名		半夏	麦門冬	当帰	川芎	芍薬	人参	桂枝	阿膠	牡丹皮	甘草	呉茱萸	乾生姜	生姜	乾姜
処方分量集		0	4	3	2	2	2	2	2	2	2	1	1	−	−
診療の実際	注1	4	4	3	2	2	2	2	2	2	2	1	−	2	−
診療医典	注2	4	4	3	2	2	2	2	2	2	2	1	−	2	−
症候別治療	注3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	3	−	2	−
処方解説	注4	5	5	3	2	2	2	2	2	2	2	1	1	−	−
後世要方解説		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
漢方百話		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
応用の実際	注5	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	3	−	2	−
明解処方	注6	5	10	2	2	2	2	2	2	2	2	3	−	1	−
漢方診療三十年	注7	4	4	3	2	2	2	2	2	2	2	1	−	2	−
臨床医の漢方	注8	5	5	3	2	2	2	2	2	2	2	1	−	−	1
あなたの病気の漢方療法	注9	5	5	3	2	2	2	2	2	2	2	1	1	−	−
漢方治療百話第四集		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−

注1　虚証の婦人で冷え症のもの，月経不順，腰冷腹痛，上熱下寒，口唇乾燥，手掌煩熱のある子宮下垂・不妊症。

注2　月経不順，冷え症で下腹に膨満感，下腹がひきつれ，掌には煩熱，唇口が乾燥するものの更年期障害・湿疹・月経不順。

注3　瘀血の証で唇口の乾燥するもの，湿疹，帯下。

注4　気血虚して(元気が衰え，貧血している)，寒冷を帯びる婦人諸病。月経不順，帯下，更年期障害(のぼせて足冷するもの)，神経症，凍瘡，手掌煩熱し，あるいは乾燥するもの。

注5　月経不順，月経困難症，諸種の婦人科疾患，帯下。

注6　唇口乾燥，下腹部冷感あるものの帯下，ノイローゼ，生理不順。

注7　月経不順，手掌の乾燥，煩熱，唇口乾燥，腰冷。

注8　元気が衰え，冷え症，貧血気味の婦人で口がかわき，手掌のほてり，下腹部膨満感のあるものの月経不順，帯下，更年期障害，自律神経失調症，蓄膿症，神経症。

注9　冷え症のあるものの不妊症。

処方番号：8　　**処方名**：温清飲（うんせいいん）

処方構成：
当帰 3-4、地黄 3-4、芍薬 3-4、川芎 3-4、黄連 1.5-2、黄芩 1.5-3、山梔子 1.5-2、黄柏 1.5-2

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度で皮膚の色つやが悪く、のぼせるものの次の諸症

効能・効果：
月経不順、月経困難、血の道症、更年期障害、神経症、皮膚炎

原典：万病回春
出典：

解説：
本方は四物湯と黄連解毒湯との合方で、四物湯の温で血行をよくし、黄連解毒湯の清で血熱をさまし、瘀血を去るの意で温清飲と名づけられたものである。
体質的には皮膚の色は黒褐色又は黄褐色を呈し、渋紙の如く、皮膚枯燥の傾向があり、症状としては掻痒甚だしく、あるいは粘膜に潰瘍出没し、のぼせて出血の傾向がある。また神経興奮の症状があり、脈は一定しないが弱くない。腹は柴胡の証に似て肋骨弓下部および腹直筋が緊張し、抵抗のあるものが多い。いわゆる肝障害を伴い、神経症や、アレルギー性の疾患に用いられる。

8. 温清飲

参考文献名		当帰	地黄	芍薬	川芎	黄芩	梔子	黄連	黄柏	用法・用量
診療医典	注1	4	4	3	3	3	2	1.5	1.5	
治療の実際	注2	3	3	3	3	1.5	1.5	1.5	1.5	
処方解説		4	4	4	4	2	2	1.5	1.5	
応用の実際	注3	3	3	3	3	1.5	1.5	1.5	1.5	
漢方処方集	注4	4	4	4	4	3	1	1	1	
処方分量集		4	4	3	3	3	2	1.5	1.5	
漢方処方		4	4*	3	4	3	1.5	1.5	1.5	
診療の実際		4	4	3	3	3.0	2	2	1.5	

* 熟地黄

注1　諸出血（子宮出血，血尿，衄血，喀血）皮膚瘙痒症，皮膚炎，湿疹，蕁麻疹，面疱(にきび)，肝斑(なまず)，ベーチェット症候群，神経症，高血圧，肝障害，アレルギー性体質の改善などに応用される。

注2　患部が乾燥して赤味を帯び，灼熱感があり，かゆみがひどく，ひっかくと粉がこぼれるようなものの，湿疹や皮膚炎，出血症。

注3　子宮出血が長引いたり，月経過多で出血多く，あるいはこしけが続き，男子では下血が長く続いて貧血症状を呈することがある。このとき，のぼせ，精神興奮，皮膚の熱感を伴う肌荒れなどがあることは少なくない。すなわち諸種の貧血，子宮出血，月経過多，胃や腸の潰瘍による下血，高血圧，神経症，血の道症，ベーチェット症候群など，また湿疹に応用する。

注4　貧血著明あるいは腰痛，浮腫などを伴うもの。子宮出血，メトロパチー，子宮癌，痔，膀胱腫瘍，腎臓結核，蕁麻疹。

処方番号：9　　**処方名**：温胆湯（うんたんとう）

処方構成：
半夏 4-6、茯苓 4-6、生姜 1 - 2（ヒネショウガを使用する場合 3）、陳皮 2-3、竹茹 2-3、枳実 1-2、甘草 1-2、黄連 1、酸棗仁 3、大棗 2　（黄連以降のない場合も可）

用法・用量：
湯

しばり：
体力中等度あるいはそれ以下で胃腸が虚弱なものの次の諸症

効能・効果：
不眠症、神経症

原典：千金方
出典：三因方

解説：
本方は茯苓飲（茯苓、朮、人参、生姜、橘皮、枳実）の朮・人参を去って代りに半夏、甘草、竹茹を加えたものと見ることができる。
朮がなくて甘草があるのは、茯苓飲より胃内停水の程度が軽く、半夏があるのは胸隔中に水飲があることを暗示。古人は水飲停滞して胆が寒え、精神不安を起こすと考えていた。
虚煩による不眠症でも酸棗仁湯のような貧血性のものでなく停水を目標とする。また二陳湯の変方とも考えられる。